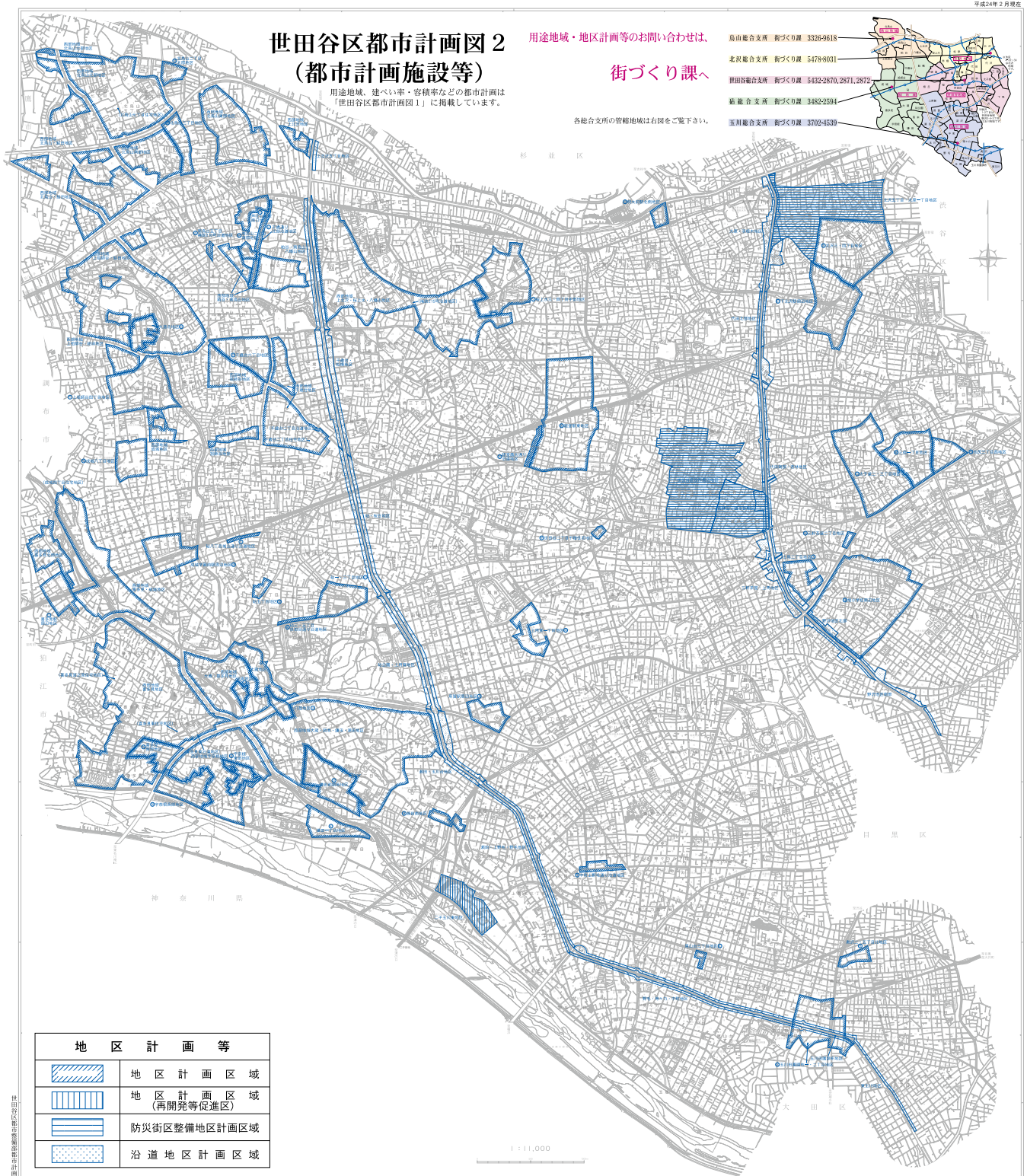


3. 地区計画等

世田谷区都市計画図2（都市計画施設等）より地区計画等のみを表示

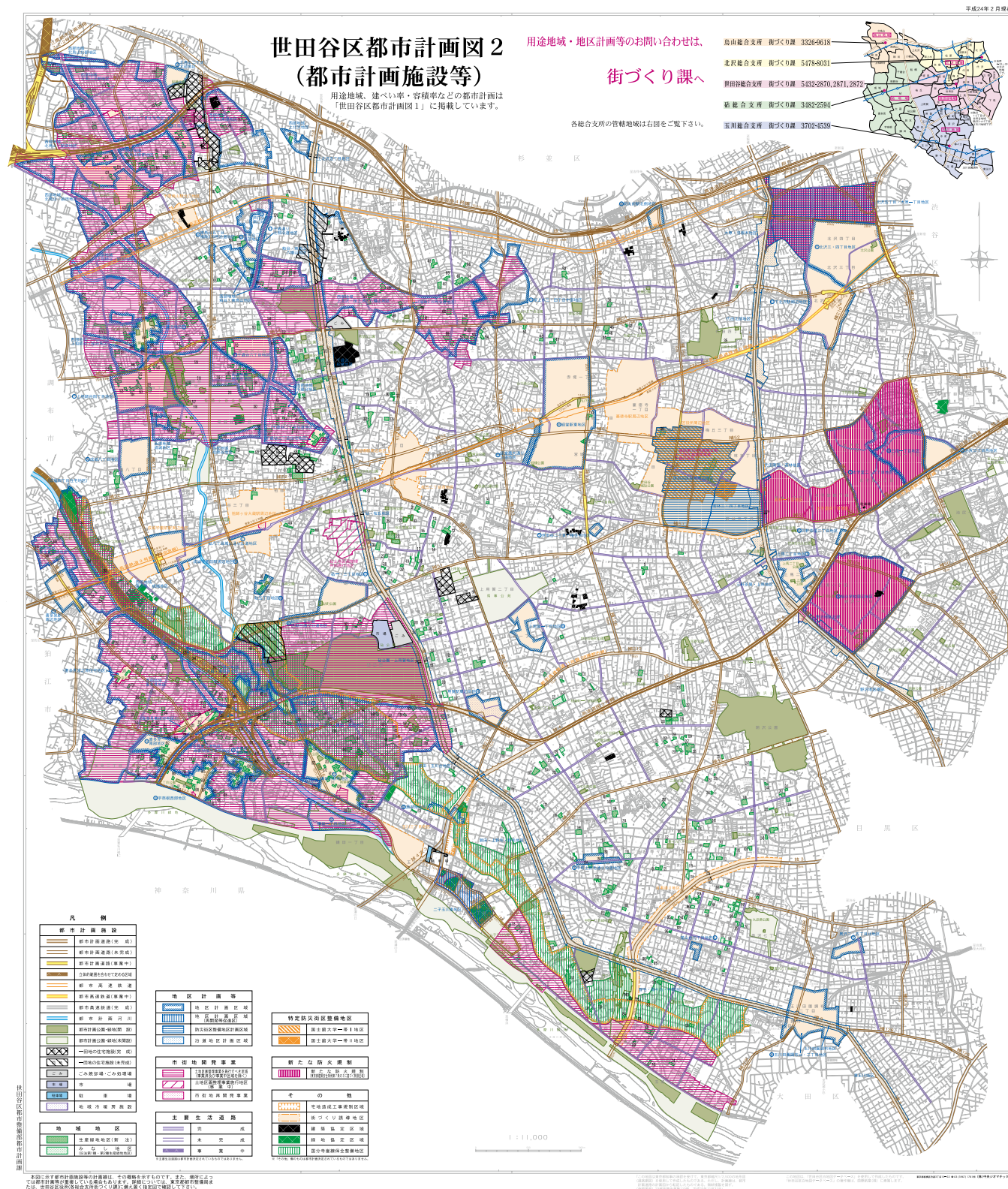


4. 都市施設

私たちが都市の中で安全で快適な生活をするためには、道路、公園、下水道などがなくてはなりません。都市計画では、将来の街づくりを考えて、このような都市の骨格を形成する都市施設の位置や規模などを定めて、計画的に整備をしています。また、将来

の事業が円滑に実施できるように、都市計画に定められた都市施設の区域内では、建築について一定の制限が課せられます。

世田谷区都市計画図 2 (都市計画施設等)



4. 都市施設

●道路

道路は、輸送機能の他に、電気・ガス・水道などのライフラインを支える埋設物の設置空間や災害時の火災延焼を防止する機能などを持っており、都市生活には無くてはならないものです。道路のうち、都市計画法によって将来整備をするための位置、幅員、延長、車線数が決められたものが都市計画道路です。都市計画道路には正式名称があり、玉川通りは「放射街路第4号線」、環七と環八は「環状街路第7、8号線」、世田谷通りは「補助線街路第51号線」などです。区内では延長約140kmが都市計画決定されていて、その完成率は約48%になっています。



昭和41年
環状街路7号線 若林踏切



補助線街路209号線
放射街路3号線

●都市高速鉄道

街と街を結び重要な役割を果たす公共交通機関で、関連する駅前広場や道路などの鉄道周辺の土地利用のあり方を考えて決定する都市施設です。区内では、小田急線、京王線、田園都市線が都市計画決定されています。現在、小田急線では、慢性的な交通渋滞の解消のために開かずの踏切をなくす「連続立体交差事業」と輸送力を増やす「複々線化事業」が同時に行われ、早期の事業完了を目指しています。



9号線（小田急線）
10号線（京王線）

●駐車場（自動車駐車場、自転車駐車場）

商業地区や駅周辺において、路上駐車や放置自動車の解消など、目的地における自動車・自転車交通の受け皿として設置する都市施設です。区内では、二子玉川の自動車駐車場と三軒茶屋の自転車駐車場があります。



自転車駐車場（二子玉川）

自転車駐車場
（三軒茶屋）

●公園、緑地

公園・緑地は、日常のレクリエーションでの利用のほか、災害時の避難場所や火災延焼の防止、ヒートアイランド現象の緩和、生態系の保全など様々な役割を果たし、私たちの生活とは切り離すことができないものです。区内には都立公園、区立公園、身近な広場など、513箇所、約253haの公園・緑地・広場があり、区民一人当たりの公園面積は3.01㎡になっています。また、規模や面積などを都市計画で定めて整備する都市計画公園・緑地の計画面積は約445haで、現在約236haが開園されています。



小泉公園

北沢川緑道



烏山プレーパーク

等々力溪谷公園

●下水道

下水道は、都市の汚れた水をまとめて衛生的に処理し、河川などの水質を保全するとともに、雨水を速やかに排除する施設です。東京23区の下水道は、東京都公共下水道として、ほぼ全域を排水区域に指定しています。

●ごみ焼却場、ごみ処理場

ごみ焼却場は、家庭や事務所から排出されるごみを焼却するための施設です。区内には、世田谷清掃工場と千歳清掃工場があり、世田谷清掃工場の中には、ガラスびんを資源化する施設もあります。



世田谷清掃工場

千歳清掃工場



4. 都市施設

●地域冷暖房施設

地域における大気汚染の防止と都市環境の改善を図る観点から、熱供給施設で集中的に作り出した熱媒体を、地域内の建築物に供給するシステムです。区内では、用賀四丁目の一部が都市計画決定されています。

●河川

河川の役割は、雨水を速やかに流し洪水などの被害防止、飲料・工業用水の水源、緑と一体となってレクリエーション空間などがあります。区内では、野川、仙川が都市計画決定されている一級河川です。



野川

●市場

市場は、生鮮食料品などの円滑な流通を図り、適

正な価格で住民に供給し、食生活などの安定を図る施設です。区内では、大蔵一丁目に世田谷市場が都市計画決定されています。



世田谷市場

●一団地の住宅施設

住宅難を解消するために設けられる施設で、道路、公園、学校など公共施設を計画的に配置した住宅団地を建設するものです。区内では、昭和30～40年代に次々と決定され、現在10箇所、約50haの団地が都市計画決定されています。



祖師谷団地（昭和32年）



大蔵団地

5. 市街地開発事業

●土地区画整理事業

土地基盤が未整備な区域において、土地の所有者が少しずつ土地を提供し、道路や公園などの公共用地に充てるほか、その一部を売却して事業資金に充て、宅地と公共施設の総合的な整備を行うものです。



経堂第二土地区画整理事業完成記念碑（昭和35年）

古くは、1909年（明治42年）に農業振興と農地形状の改善のため耕地整理法が制定され、区内でも耕地整理事業が盛んに行われました。玉川全円耕地整理事業はその代表的なものです。その後、都市のスプロール化を抑制するために定められていた環状緑地帯の緑地地域から、1969年（昭和44年）、「土地区画整理事業を施行すべき区域」として1,348haが都市計画決定され、この区域のうち14地区、142.0haの土地区画整理事業が完了しています。



喜多見東土地区画整理事業

●市街地再開発事業

市街地内の老朽化した木造建築物の密集地域や十分な公共施設が整っていない地域において、細分化された宅地の統合、不燃化された共同建築物の建築、道路・公園等の公共施設の整備を行い、土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新を図るものです。

区内の再開発事業は、「第一種市街地開発事業」という権利変換方式の手続きにより行われ、従前の建物・土地所有者は等価で新しい再開発ビルの床を受け取り、土地の高度利用によって生み出される新たな床の処分により事業費に充てられています。これまでに5地区が都市計画決定され、そのうち4地区が完了し、現在二子玉川東地区で事業が進められ、地域の活性化や市街地環境の向上に貢献しています。



野沢四丁目地区



三軒茶屋・太子堂
四丁目地区



芦花公園駅南口地区

コラム

「文学から見る世田谷の土地利用（その1）」

徳富蘆花、千歳村粕谷での暮らし

徳富蘆花が粕谷（現在の芦花恒春園）に住み着いたのは、1907年（明治40年）2月でした。その頃の粕谷は、千歳村の一字で粕谷の他に上祖師ヶ谷、下祖師ヶ谷、船橋、廻沢、八幡山、烏山、給田と八字がありました。著書からは当時の粕谷の風景や生活が想像できます。

～徳富蘆花～「みみずのたはこと」

『一番戸数が多いのが烏山二百余戸、一番少ないのが八幡山十九軒、次は粕谷の二十六軒、余は大抵六十戸。・・・水の流るゝ田圃や、富士大山から甲武連山を色々に見る原、霜解の里道を往けば江戸みちと彫った古い路しるべの石の立つ街道があり、櫛、麦畑・・・』



徳富蘆花
(M1.10.25～S29.9.18)

・・・勝手口から唯六歩ばかりのところにある井（いど）は、井汲えをしてみても赤土水の濁り水で、・・・家から五丁程西の品川堀、灌漑専用の水だが、付近の村々の朝々顔を洗えば、縹襦（おしめ）の洗濯もする、肥桶も洗う。何に玉川の水だ、朝早くさえ汲めば汚いことがあるものかと、・・・いつまでも川水を汲んでばかりは居られぬので、一月ばかりして大仕掛けに井汲えをすることにした。・・・井底深く二つ三つの湧き口から潺々（せんせん）と清水の湧く音を聞いた時、最早（もう）水汲みの難行苦行も後になったことを、嬉しくもまた名残惜しくも思った。』

ボロ市

現在の世田谷区が農村であった時代、世田谷地区の人々の年末の楽しみはボロ市でした。そこでは、物が売買されるだけでなく、地域の祭りや社交の場でもあったようで、その日には朝早くから近在の人々があちらこちらから足を向けたのでした。徳富蘆花は明治末期から大正初めの様子を、斎藤茂吉は昭和初期の様子を描いています。

～斎藤茂吉～

『北平（北京）も
巴里（パリ）も知りてわれ居れど、
此処の襤褸（ぼろ）市に
しばし親しむ』

さいとうもきち
斎藤茂吉
(M15.5.14～S28.2.25)



～徳富蘆花～「みみずのたはこと」

『十五日が世田ヶ谷のボロ市。世田ヶ谷のボロ市は見ものである。松蔭神社の入り口から世田ヶ谷の上宿下宿を打通して、約一里の間は、両側にずらり並んで、農家日用の新しい品々は素より、東京中の煤掃きの塵箱を此処へ打ち明けた様なあらゆる襤褸（ぼろ）やガラクタをずらりと並べて、売る者も売る、買う者も買う、と唯驚かるばかりである。』



ボロ市の様子（昭和28年） ボロ市の様子（昭和30年）

玉電の開通

玉川電車の開通は、1907年（明治40年）のことでした。しかし、電車が開通しても、沿線の人々は始めのうちはあまり便利だとは思っていなかったといえます。もっとも玉電の始めの敷設目的は砂利の運搬でした。沿線の人々は、1区3銭の運賃を惜しんで歩くことが多く、東京市中の人びとにとつての行楽の足だったので、郊外電車と称されていました。田山花袋が、玉電に乗って郊外へ向かったときの田園風景を書いています。「東京の人の移住地には遠すぎる」と田山花袋が予想する程、当時の世田谷には田園風景が広がっていたことが想像できます。

～田山花袋～「東京の近郊」

『澁谷の停留所は山手線の重要な驛（えき）である。・・・電車に乗って道玄坂に沿った道を上がって行く。大橋、世田ヶ谷、池尻、太子堂、三軒茶屋などといふ停車場がある。初めは坂の上の平坦な道路を走ってゐるが、段々下りになって、前に富士を遠く見渡してゐる。』



たやまがたい
田山花袋
(M4.12.13～S5.5.13)

・・・新町、用賀、瀬田、玉川遊園などといふ停車場が相繼いでゐる。遊園地近所には、東京の人の移住を希望した地所などが澤山にあるけれど、またさういふ人のために便利を謀ってあるけれど、未だ十分の発展を見ない。将来の発展も疑はれる。都會と野との接触地としてはやゝ遠すぎるやうな心持がする。』



コラム

「文学から見る世田谷の土地利用（その2）」

移住した人々

大正の末期、坂口安吾は下北沢にあった分教場（現在の代沢小学校）に勤務していました。また、北原白秋も郊外住宅に移り住んだ新住民のひとりです。1928年（昭和3年）、子どもを砧村の成城学園に通わせるため、大森区（現・大田区）緑が丘から若林に転居してきました。

～坂口安吾～「風と光と二十の私と」

『私が代用教員をしていた頃は、世田谷の下北沢というところで、その頃は荏原郷と言ひ、まったくの武蔵野で、私が教員をやめてから、小田急ができて、ひらけたので、その頃は竹藪だらけであった。本校は世田ヶ谷の町役場の隣にあるが、私のはその分校で、教室が三つしかない。・・・学校の近所には農家すらなく、まったくひろびろとした武蔵野で、一方に丘がつらなり、丘は竹藪と麦畑で、原始林もあった。この原始林をマモリヤマ公園などと称していたが、公園どころか、ただの原始林で、私はここへよく子どもをつれて遊ばせた。』



さかぐちあんご
坂口安吾
(M39.10.20～S30.2.17)

～北原白秋～

『霞（つちふ）らし嵐吹き立つ春さきは
代々木野かけて朱（あけ）の風空
風面（かざおもて）朱に吹き立つ春真昼
ゑぐき埃に食（じき）いとふなり
多摩川に砂利あぐる音の風向（かざむき）を
ひとひきこえて寒あけずいまだ』



きたはらはくしゅう
北原白秋
(M18.1.25～S17.11.2)

蘆花恒春園の開園

徳富蘆花は、1927年（昭和2年）に亡くなり、夫人愛子が一人住んでいた「恒春園」は、1938年（昭和13年）春、彼女の住宅を一部残して東京市に寄付されました。世田谷区に初めて公園がつけられたのは1937年（昭和12年）の世田谷新町公園で、蘆花恒春園はその翌年で、都市化の一環として進められた市街地整備の先備をいくものでした。このことについて夫人は以下のように記しています。

～徳富愛子～

『大正二年三月十三日「みみずのはこと」は初めて世に生まれましたが、それから早くも二十五年の月日がたち、私どもの粕谷村も昨春から東京市に編入されてから粕谷町となり、それを機に、私にもいささか考えられます節もありましたので、私どもの家、屋敷、今は自然林とも見ゆる夫が植えた数々の樹木、書籍などを挙げて東京市の管理に委ね、東京市ではこれを蘆花恒春園と命名し、去る二月二十七日、私どもが東京から



とくとみあいこ
徳富愛子
(M7.7.18～S22.2.20)

この地へ引越の日を記念して墓前奉告の開園式が行われ、公開と共に長く保存していただくことになりました。』

玉川全円耕地整理事業

玉川全円耕地整理事業—それは現在の世田谷区のほぼ4分の1を占める旧玉川村の全域におよぶ耕地整理によって、近い将来の宅地化にそなえて計画的な地域開発が計られ、事業が完了したのは1954年（昭和29年）、組合が準備されてから30年後のことでした。その事業についての記述が、ここに住んだ石川達三が文を寄せています。

～石川達三～「住み着いた感じ」

『こゝへ転居して来たときから、このあたりには整然たる道路ができていた。それが耕地整理組合の苦心の結晶だなどは、一向に知らなかったが、知らされて見て、改めて感謝すると同時に、当初それを計画し実行した発起人諸氏の炯眼に驚いている次第だ。かういふ仕事は私たちのやうな新入りには出来ることではない。やはり代々住んで来た地元の人の叡智によるものだと思う。



いしかわたつそう
石川達三
(M38.7.2～S60.1.31)

・・・九品仏は東京でありながら適当に田舎だ。田舎だけれども東京の文化的なものはすべて備わっている。子供を育てる環境としては一番いい所ではないかと思ふ。十分歩けば多摩川の岸に出て、つみ草も出来るし、九品仏の池のあたりでエビガニを掴むことも出来る。かういふ場所は東京にも沢山はない。偶然に住みついたやうなものであるが、ずいぶん巧い場所を選んだものだと思はれている。』

戦後の夜空

戦争が終わると、世田谷でも市街化が着実に進み、野や丘が減少しました。桜新町に住んでいた野尻抱影は「星まんだら」の中で、世田谷の街の移り変わりと共に、この街に住む人の眼から見える夜空の様子に移り変わりを記述しています。

～野尻抱影～「星まんだら」

『世田谷の桜新町に住み着いて、そろそろ半世紀にとどく。七号線（現玉川通り）というハイウェイが町を東西に貫いたため、わたしの古い家は、暗れがましくも四つかどになってしまった。その代り、路はばが三十メートルもあるので、そこまで出ると、今ごろは雪の富士が真西に見えるし、夜は冬の先駆けのすばる星から、オリオンを中心とする豪華な諸星座が、東の空にばらまかれる。これは思いがけない拾いものだった。けれど、戦前に比べると、星数はげっそりと減った。都心の方向はむしろだが、地もとの空明かりでも星の光は奪われて、ことに駒沢でナイターのある間は天頂近くまではほとんどグダメになった。それにバスやトラックの地響きが望遠鏡の星をふるわせ、秋の土星などもリングの形が乱れるので舌打ちするばかりだった。』

のじりほうえい
野尻抱影
(M18.11.15～S52.10.30)